「放送教育」1992年8月号

展望

教育とメディアにおける不易と流行

「テレイクジステンス」と「現象学」のすすめ

東京大学教授

吉田章宏

「不易を知らざれば基たちがたく、流行を知らざれば風新ならず」（去来抄）は、俳句についての言葉である。不易と変化とは同一であり、不易性は、固定することではなく、不断に変化することで可能になる、というのが芭蕉の真意だと伝えられている。

教育における不易、「共に育ちましょう」

一般常識の理解では、教育とは人が人を「教え育てること」である。「生涯教育」に代わって「生涯学習」という言葉が好まれるようになった背景の一つには、「教育」という言葉についてのそうした常識的理解があったものと思われる。しかし、「教育」の語ではなくて、この語が指し示す「事柄自体をありのままに見る」べく努めてみよう。するとそこには、「教育とは、子どもがみずからの力で思考し、決断し、行動する状況を教師が意図的に配置するいとなみでもある」（武田常夫『真の授業者をめざして』国土社、四〇ページ）という理解、さらには「教えないことが教育だ」（同上、四三ページ）という一層深い洞察さえ生まれてくるのが見える。教育とは、「濃縮された時間」（小木貞孝／加賀乙彦）を生きる豊かな「世界」を配置する営みでもある。そして、さらにその奥には、この深い教育理解を自ら育てるにいたる教師の豊かな「生きられる世界」（Lived world）の歴史もまた見えてくる。

教育の本質は「生きられる世界の出会い」（吉田章宏『教育の方法』放送大学教育振興会、一九九一年）にある。それぞれの「生きられる世界」に「多即一、一即多」の「多様と統一」、「一葉の落ちるを知って、天下の秋を知る」の豊かさを生むのが教育である。

それ故、「共に育ちましょう」という芦田恵之助が残した平易な言葉に、時代、社会、文化を超えた、教育の「不易」の本質が秘められていることも、また、次第に見えてくる。

メディアにおける「流行」、「テレイクジステンス」

メディアは、豊かな「生きられた世界」を共に育て共有するための道である。したがって、教育は新しいメディアを求め、新しいメディアは教育の可能性を開く。このことは不易である。現代社会においては、メディアは最先端科学技術の集中する「流行」の激しい交差点でもある。メディアにおける今日の「流行」の最先端は、「テレイクジステンス」、

「人工現実感」、「バーチャル・リアリティー」、「仮想現実技術」などの諸概念に集約されつつある極めて広範な先端技術の交差点にあるようだ。最近刊行された「その技術と文化の最新の研究成果を伝える研究現場からの第一報」には、「人工現実感とは、人間が今、現在、実際に存在している環境以外の仮想環境を、あたかもそれが現実の環境のような感覚を持って体験し、かつその仮想世界で行動することを可能とする新しい技術である。一方、テレイクジステンスとは、人間が従来の時空の制約から開放され、時間と空間ないしはそれらの両者を隔てた仮想環境に存在することを目指す新しい概念であって、人工現実感を別の観点からいい表している」（館暲・広瀬通孝『バーチャル・テック・ラボ…「超」現実への接近』工業調査会、一九九二年、一一ページ）とある。その具体的実現形態は極めて多様だ。ロボットをメディアとして別の実世界に赴く遠隔現実・遠隔臨場感と、コンピュータ等が作りだした仮想世界に赴く仮想現実感とが区別される。人工現実感の特徴は、「臨場感」、その世界で自由に行動し相互作用する「実時間相互作用性」、分身による「自己投射性」にある。

かつて、ベラ・バラージュは、映画の画期的な新しさについて、「われわれは画面の中にいる」と書き、「カメラが観客の目を映画の筋と画面の中へひきずりこむ」（佐々木基一訳『映画の理論』学芸書林、一九七〇年、四〇～四一ページ）と書いていた。もし今日バラージュが生きていたら、「人工現実感技術」の芸術における可能性を鋭く直感していたに違いない。それは、「画面」ではなくて、実世界であれ仮想世界であれ、日常世界とは別の「世界」に、「目」ではなくてわれわれの「分身」を引きずり込み、自由に行動させ、そこの存在者と相互作用する参加芸術の経験を可能にする。カフカ『変身』や安部公房『他人の顔』の、分身による一人称的体験も可能となるのだ。すっかりロボットになりきっていたとき、「ロボットという自分の分身である他者の目から、自分の後ろ姿を見る」経験をしたときの驚き（服部桂『人工現実感の世界』工業調査会、一九九一年、一〇四～五ページ）の叙述は、この先端技術のもつ、芸術ばかりでなく、豊かな経験のために「世界を配置する」教育における、豊かな可能性を予感させ確信させるに十分なものであった。

人間経験の「不易」の学的探究、「現象学」のすすめ

歴史の中で、「不易」に、「人間経験の意味と構造」を学的に最も詳細かつ豊かに探究し

てきたのは「事柄自体をありのままに見る」ことを目指して努めてきた現象学だ、と現在の私は信じている。E・フッサールを始祖とする現象学が「人間経験の構造と意味」と「生きられた世界」を探究したその豊かな学的遺産の蓄積に初めて接したときの私は、驚愕と感嘆で息を呑み、声さえ出なかった。

最近、「人工的現実感」についての前記「研究現場からの第一報」を読み、これまでのぞいたこともなかったゲーム・センターなどに赴き貧しいながらも幾つかの体験を試みた私は、現象学のさまざまな輝かしい業績を思い起こして、独り興奮していた。「…結局二つの目の網膜に映し出された二枚の映像だけしか人間は利用していない。ただ、時々刻々の変化を能動的にとらえそれから三次元を再構成しているのだという事実を再発見し…。直接視で得られるのと同一の網膜像を計測と制御の力で人間に与え続ければよい」(前掲書、一〇二ページ)と洞察した館氏の発見は、フッサールによる「視点」、「射映」、「地平」、「構成」、「過去把持」、「未来把持」、「内的時間意識」などの現象学的洞察に深く通じるものであろう。館氏の発見が現象学からは独立に生まれたことが、実に興味深かった。同様に、「存在と現実」、「現実と虚構」に関する現象学的洞察、あるいは、A・シュッツの「多元的現実論」、「ドンキホーテ論」などは、「人工的現実感」の一つの理論的基盤になりうるだろう。「私達は何事かを理解しようとする。これは私達がその意味を自分達自身にあきらかにしようとしているということだ。その何事かを理解すると、私達は今度は、その理解したことを他者に伝えようとする。これがもっとも広い意味での科学の本質である」(E・キーン『現象学的心理学』東京大学出版会、一九八九年、五二ページ)。だとすれば、人間経験の豊かな「不易」の学「現象学」の伝統と遺産とが、「流行」メディアの最先端「仮想現実技術」と、本質的なところで豊かに「伝え合う」ことで、教育の世界に豊かな「共に育ちましょう」をもたらす可能性が、直感されるのだ。

教育、メディア、科学・学問それぞれの不易と流行が互いに「伝え合い」、それぞれの「不易流行」が生み出されていく。芭蕉の「不易流行」の教えは、流行の「教育とメディア」にも不易であるようだ。教育と仮想現実と現象学についての私の一句である。